

(仮称) 紫波町 食と農の育成学校 コンセプトブック

2026年6月

はじめに

紫波町は、紫波町第三次総合計画において「暮らし心地のよいまち」を掲げました。

町の中央部では宅地開発が進み、2026年には赤石小学校の増築を行うなど、人口の社会増となっています。一方で、農村地帯である東西の地域では、人口が大幅に減少し、小学校8校を2校に再編しました。

紫波町の基幹産業は、農業です。東部ではぶどうやりんごを中心とした果樹栽培、西部では稲作・畑作・畜産による複合経営が営まれ、農は地域の暮らしや風景を支えてきました。

しかし、農業の担い手と耕作地の減少は年々進んでいます。農地が宅地へと代わり、若い世代が農業を継承せずに町を離れ、日々の営みと「農」との距離が離れつつあります。農業を営んでいる人は、営農環境を維持することが今後一層難しい状況になることが予想されます。

そこで、「食と農の育成学校」構想を掲げ、すでに農業を営んでいる人や就農を目指す人、農に関心を持つ人々が学び合い、「食」を通じて「農」との距離を近づける仕組みを検討します。

「食と農の育成学校」が目指すのは、まちの食と農を取り巻く全ての人たちが、互いのことを理解し、共通言語を持つことで、楽しさも大変さも分かち合う未来をつくることです。

農が根付き、息吹くまち、紫波町。

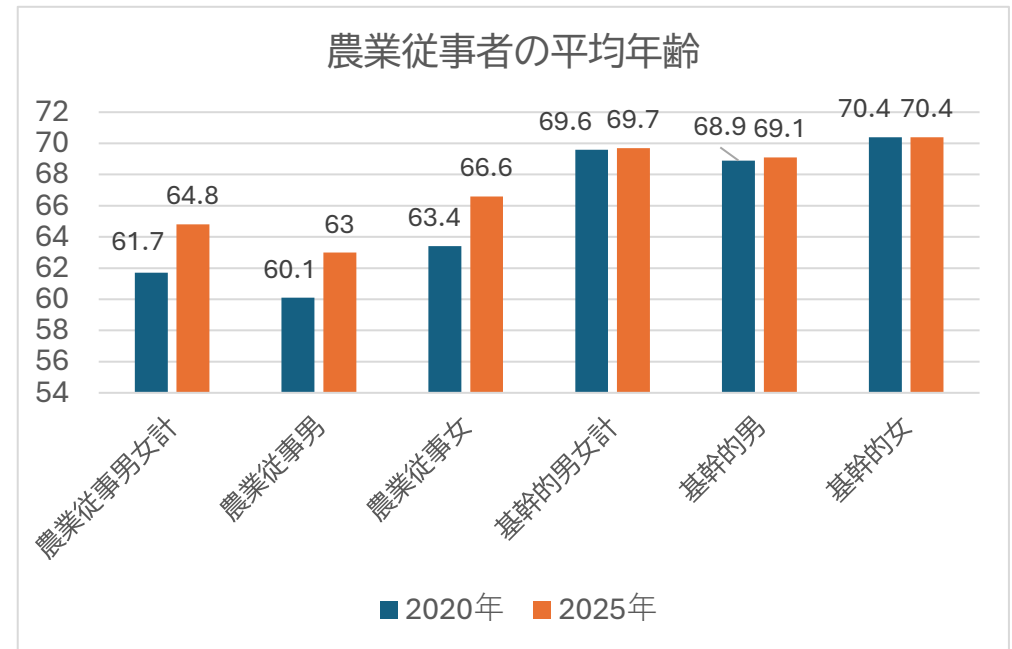
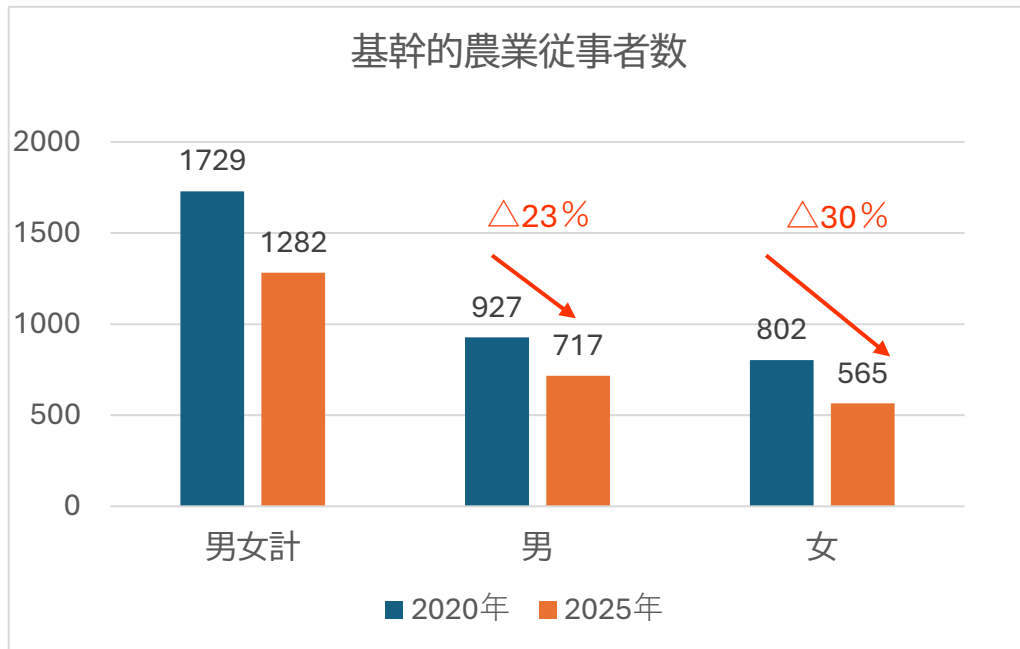
紫波の大切な資産である「人」「農地」「技術」を未来へつなぎ、100年後も農とともに豊かに暮らせるまちを、この学校から育んでいきます。

紫波町の概要



紫波町は岩手県の中央部に位置し、北上川が育む肥沃な平野を有するまちです。全国有数のもち米の産地であるほか、小麦やそば、りんごやぶどうを中心とした果樹、野菜、畜産など多様な農業が展開されており、地域の自然環境と調和した農業経営が行われています。また、農業生産だけでなく、日本三大杜氏の一つ「南部杜氏」発祥の地でもあり、酒蔵やワイナリーをはじめ町内で9の醸造所があるほか、町内に8カ所の産直施設があるなど、食の面でも豊かな環境となっています。

まちの農業の担い手の現状



※農業従事者・・・年1日以上 基幹的・・・主に農業中心

●基幹的農業従事者数

2020年と2025年の比較では、基幹的農業従事者数は1,729人から1,282人へ447人（△26%）減少しています。特に女性の減少率が30%と高く、離農傾向が強いことがうかがえます。

●農業従事者の平均年齢

年1日以上農業に従事する「農業従事者」の平均年齢は、5年間で3.1歳上昇しています。一方で、基幹的農業従事者の平均年齢はほぼ横ばいで推移しています。このことから、約70歳で高止まりしている農の担い手だけでなく、「農の関わり手」の高齢化も進んでおり、若い世代の農とのかかわりが希薄であることがうかがえます。

まちの「農」の新しい資源



農ある暮らしに触れられるきっかけづくりや、つながる場がひらかれています。

いきなり農家になるだけが、農とのかかわり方ではない。

「美味しそう」「楽しそう」「面白そう」「やってみたい」—そんな『小さな好奇心の芽』を伸ばしていくことができれば、農をきっかけとした豊かな生活を送れるのではないのでしょうか。

(仮称) 紫波町「食と農の育成学校」によって実現したい、3つのまちの姿

① 誰もが主役になれて、多様性のある農のまち

担い手不足が急速に進む中で必要なのは、「農」に対する多様な考え方やかかわり方を受け入れ、町の中で農への理解を広げることだと考えます。農業に従事する人も、経営や栽培に対する考え方は人それぞれです。また、消費者の中でも、農とのかかわり方はさまざまです。それぞれの違いを認め合いながら、誰もが自分の思いを尊重できる農のまちが推進されることを目指します。

② 食と農の学びを通して養われる「生きる力」が強いまち

町の中央部に住む方々にとって、「農」は身近な存在となっているのでしょうか。昔よりも非農家が増えている社会において、農にふれ、学ぶ機会は乏しくなっています。一方で、町内には8つの産直施設があり、食を通して農にふれることのできる資源があります。農にふれることで、「生きる力」を身に付け、大人だけでなく、子ども、親、さらにその親世代まで共に学び合う場を目指します。

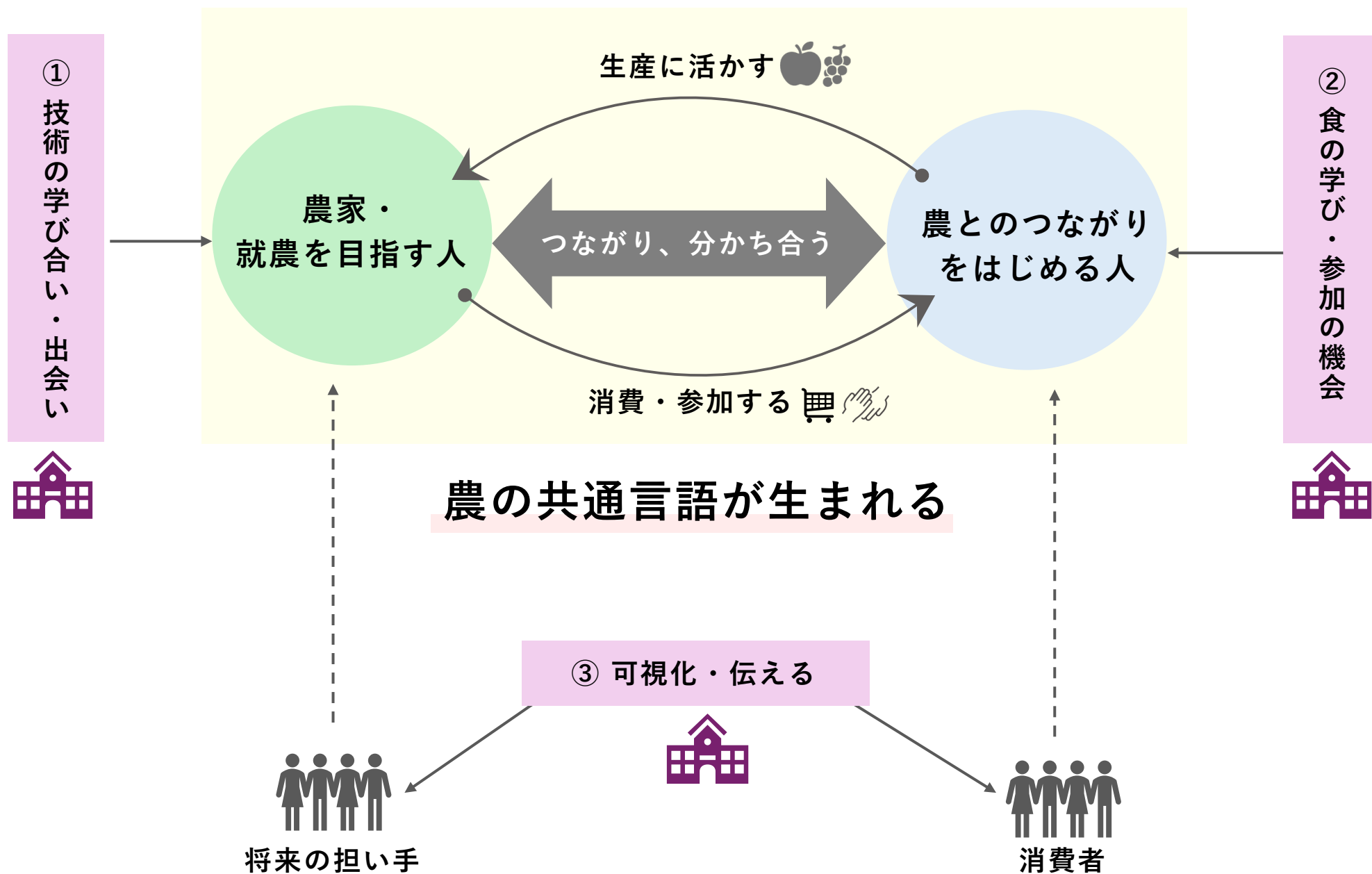
③ 農業者と多様な人々の交流がすすみ、農にまつわる共通言語が広がるまち

多様な価値観が混ざり合うことで、人は考えを深めたり、新しい発想を得ることができます。これまでの考え方や慣習を大切にしながらも、人と人との交流から生まれる、新たな価値観を大切にしていきます。そこから生まれたアイデアを実践につなげていくことで、新たな農業者が生まれ、農業のかかわりしろが広がることで、共通言語が持てるまちを目指します。

(仮称) 紫波町「食と農の育成学校」が目指す、10 のコンセプト

- ① 農の「担い手」と「関わり手」が混ざり合う場をつくり、農業のハードルを下げよう
- ② 農と農村のかかわりしろを増やすきっかけをつくろう
- ③ 新しい技術や価値観を取り込める土壌をつくろう
- ④ 農業を仕事にしたいと思う人が、自信をもって所属できる学校にしよう
- ⑤ 担い手になる人だけでなく、消費者への教育も大切にしよう
- ⑥ 農にふれることで「生きる力」を育み、子どもも大人も一緒に学ぶ場をつくろう
- ⑦ 自分らしい農のかかわり方を見つけられる場にしよう
- ⑧ 農に関する共通言語をひろげよう
- ⑨ 農業の楽しさも大変さも分かち合える文化をつくる場にしよう
- ⑩ 食の技術者から学び、家庭に還元することで、食の豊かさを体感できる環境をつくろう

(仮称) 紫波町「食と農の育成学校」の設置イメージ



イメージするカリキュラム例

りんごの摘花から収穫、調理の体験まで

果樹栽培の現場作業は人力で行うものが依然として多く、季節によって多くの人手を必要とします。スキマバイトアプリ「タイミー（Timee）」とJAが連携するなど、繁忙期の人材確保の仕組みが広がっています。農繁期の農作業に参加する機会を設けることで、基本的な作業を学び、収穫した果実を調理する体験を通して、参加者の「やってみたい」「またやりたい」の気持ちを育み、農との継続的なかかわりを持つことを目指します。

コメ栽培で使用する機械の運転・作業の体験

コメ栽培には耕起、代かき、田植え、除草、稲刈りなど、作業工程ごとにさまざまな機械が使用されます。機械操作を担う人材が固定化していることにより、大規模なコメ農家や法人経営体ではオペレーター不足が課題となっています。農業機械の基本的な操作やスマート農業機械を体験する機会を通して、これまで農業機械に馴染みのなかった人の参入を促し、農業を支える人材の裾野を広げます。

はじめて土にふれる人への菜園講座

農業を仕事にすることだけが、農とのかかわり方ではありません。土にふれ、自ら作物を育てる体験を通じ、農をより身近に感じる機会があることで暮らしが豊かになると考えます。家庭菜園や体験農園で必要な基礎知識や栽培方法を学びながら、自分で食べるものを育てる楽しさや、暮らしの中に農を取り入れる方法を学びます。

食からはじめる農とのつながり学習会

私たちは日々の食事や食材の購入を通じて、農とつながっています。流通の仕組みや生産者の思いは、普段の消費活動だけでは知ることが出来ません。旬の食材を選び、調理し、食べるというプロセスをあらためて学ぶ機会を設けることで、日常の行動が農を支えることにつながることを学び、食を通して農にかかわる力を育みます。

「食と農の育成学校」から生まれる学びの収穫と100年後の姿

学びの収穫のイメージ



100年後の姿

- ・ 紫波町の農業者であるということが誇りとなり、経営や農地が後世に引き継がれている。
- ・ 年齢を問わず農にふれ、町の食や農をきっかけに、紫波町での暮らしが「自分らしい」と思える。

紫波町
地域づくり課
地域共創係